「今日も楽しいね」と笑って生きられる島を目指した池間島型地域包括ケアシステム視察報告

諏訪 亜季子[1)*]，大西 美智恵[2)]，篠岡 有雅[3)]，中嶋 亜紀[4)]

[1)]香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科
[2)]香川大学医学部看護学科
[3)]綾川町健康福祉課地域包括支援センター
[4)]三木町役場健康福祉課

Observational Report on Ikema Island Style Comprehensive Community Care System that Aims to Make the Island a Place Where People Smile and Say : “Today is Another Good Day”

Akiko Suwa[1)*], Michie Ohnishi[2)], Yuka Sasaoka[3)], Aki Nakajima[4)]

[1)] *Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Kagawa Prefectural University of Health Sciences*
[2)] *Department of Nursing, Faculty of Medicine, Kagawa University*
[3)] *Ayagawa Town Health Welfare Section Regional Comprehensive Support Center*
[4)] *Miki Town Office Health and Welfare Section*

要旨

沖縄県宮古島群島の小離島で，島出身の６人の主婦が特定非営利活動法人（ＮＰＯ）を立ち上げ，小規模多機能居宅介護サービスを運営し，島おこし事業へと発展させている．その先駆的活動を視察し，先駆者達からこれまでの経緯を伺ったので報告する．

いけま福祉センターは，陽気な主婦６人の島への愛着と持前のバイタリティー，パワフルな行動力で小規模多機能型居宅支援事業所を立ち上げていた．これを原点とし，更なるニーズを洗い出し，高齢者介護事業，民泊事業，アマイ・ウムクトゥ（昔から伝承されてきた島で生き抜く力や生きる知恵を掘り起こす）プロジェクト，すまだてぃ（島おこし）活動へと発展させていた．その基盤には島を慈しみ島で暮らすことを愛しみ，島に恩を返したいという想いがあることが伺えた．その根強い地域力を活かして，さまざまな健康レベルの高齢者とともに次の世代，さらに次の世代へと伝承していき，島への恩送りを継承していく相互扶助の文化が形成されており，自助と互助を中心とした新たな地域包括ケアシステムの目指すべき姿があった．

Abstract

Six homemakers from a small outlying island in the Miyako Islands of Okinawa Prefecture started an NPO to operate a small-scale, multifunctional home care service, and have since developed it into an island revitalization project. We observed those pioneering activities and interviewed the women who started the project about its history so far. The Ikema Welfare Support Center was started as a small-scale, multifunctional home support office after 6 cheerful homemakers, who loved the island and took action with characteristic vitality and power, asked the opinions of nearly all the island residents to identify the things most needed on the island. The Center then gathered the personnel needed at any given time and uncovered new needs, expanding to a community-based island revitalization project that includes an elderly care project, vacation rental project, *amai umukutu* (Digging up the power to survive and the living wisdom on the islands traditionally passed down) project, and *sumadati* (island revitalization) activities. As the basis of these activities, we observed a culture of mutual assistance in which elderly people of various health levels who cherish the community and love living there pass on traditions to the young people of the next generation and the generation after that, who will become the elders of the future.

Key Words：視察報告(observational report)，宮古島群島(outlying island in the miyako islands)，地域包括ケアシステム(comprehensive community care system)，相互扶助(mutual aid)，島おこし(island revitalization)

*連絡先：〒761－0123 香川県高松市牟礼町原281－1　香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科 諏訪亜季子
*Correspondence to：Akiko Suwa, Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Kagawa Prefectural University of Health Sciences, 281-1, Hara, Mure-cho, Takamatsu, Kagawa 761-0123, Japan
E-mail : suwa@chs.pref.kagawa.jp

はじめに

我が国では，団塊の世代が75歳以上となる2025年問題に向けて，地域の特性・実情に応じた地域包括ケアシステム構築に向けた取り組み[1)]が各自治体で進められている．

地域包括ケアシステムは，高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援目的で，可能な限り住み慣れた地域で生活を継続することができるような包括的な支援・サービス提供体制の構築を目指し，「介護」，「医療」，「予防」という専門的なサービスと，その前提としての「住まい」と「生活支援・福祉サービス」の５つを構成要素としてきた．その後，新たな地域包括ケアシステムの姿を整理するため，シンボルである植木鉢の構成要素も見直され進化した[2)]（図１）．

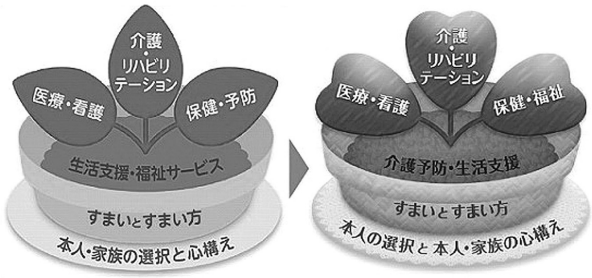

図１　進化する地域包括ケアシステムの「植木鉢」[2)]

この進化した地域包括ケアシステムの「植木鉢」では，これまで「葉」の中に位置づけられていた介護予防活動は，自助や互助などの取り組みから社会参加の機会として，それぞれの日常生活に根ざした生活支援と介護予防を一体として再整理されている．それとともに，重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるような地域包括ケアシステムの構築を目指す姿勢は存続している．

このような，多様な個別性に応じたサービスの提供と様々な健康レベルにも対応した高齢者の社会参加を一層進める場所となり，元気な高齢者が生活支援の担い手として展開が着目されているサービスの一つに小規模多機能型居宅介護事業所がある．

小規模多機能型居宅介護事業所[2)]とは，通いを中心に訪問や泊まりのサービスを提供する小規模多機能型居宅介護に，介護予防拠点や地域交流施設の併設を義務付け，健康づくり，閉じこもり防止，異世代間交流などの介護予防事業を行うとともに，地域の集まり場，茶のみ場を提供し，ボランティアも含めた地域住民同士の交流拠点となることが期待されている介護保険サービスである．

この小規模多機能型居宅介護事業所を立ち上げ，地域住民の拠点地となり，モデル施設となっている施設の一つにいけま福祉センターがある．

いけま福祉センターは，沖縄県宮古島群島の小離島で島出身の６人の主婦が特定非営利活動法人（Non-Profit Organization：以下，NPO）を立ち上げ，小規模多機能居宅介護サービスを運営しつつ，多くのボランティア移住者である若者を呼び寄せ，島の再活性化をもたらし，さらなる島おこし事業をも展開している．今回，その小離島に視察研修する機会を得て，先駆者達に実際の活動とこれまでの経緯を伺ったので報告する．

視察の概要

１．目的

沖縄県立看護大学と香川大学が開催した研究会で，相互扶助の形成と高い住民力により島を蘇らせている地域再生の先駆者達がいると紹介を受け，その活動とこれまでの経緯を伺う目的で視察した．

２．視察期間とスケジュール

視察期間は2016年５月28日から５月29日であった．早朝に岡山空港より出発し，那覇空港経由で正午過ぎに宮古島空港到着し，沖縄県立看護大学の教員の方々のご案内で，いけま福祉センターの視察を行った．その際に，宮古病院の看護部長と看護部職員も，貴重な面談の機会ということで同席された．

池間島の概要

１．位置

沖縄県宮古島群島は，沖縄本島から南へ約290km・石垣島の東北東約133kmに位置し，宮古本島・池間島・大神島・伊良部島・下地島・来間島・多良間島・水納島の八つの有人島からなる．池間島は，宮古本島から北西約16kmにある周囲９kmの小さな島である．車で10分ほどで池間島を一周できる．宮古本島とは，池間大橋（1992年２月開通）でつながっており，宮古の市街地からは車で30分ほどで行き来できる距離である（図２）．

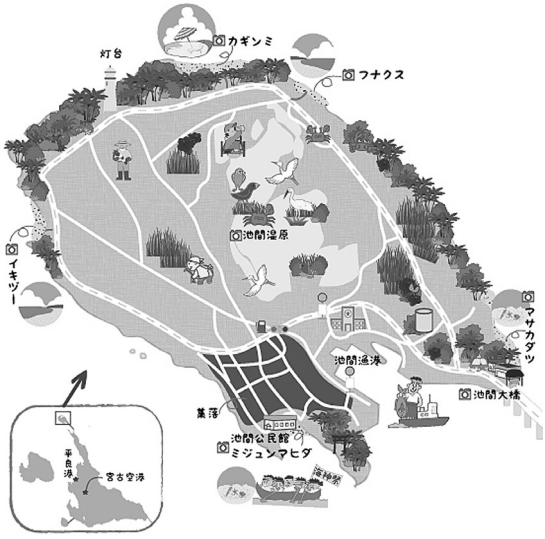

図２　池間島の概要図
出典:池間島総合観光情報サイト http：//www.ikemajima.net/

２．池間島の概略

池間島は，かつてカツオ漁で興隆を極めた海洋民族の島で，もともと２つの島だったが，1525年に「四島の主」が島民を動員して現在のフナクス（船越）に石橋を積んだと言われている．1983年には，池間漁港が開港された．その際の埋立工事により汽水域であったイーヌブー（北の入江）内は淡水化し，現在の湿原へと変わっていった．沖縄県内最大の湿地で環境省の日本の重要湿地500にも選定されているが，現在ではヒメガマなどの植物が繁茂し，陸地化が急激に進んでいる[3]．

2013年２月に国の名勝・天然記念物に指定された池間島の北東の沖合に広がる南北17km，東西6.5kmの海に大小100あまりのサンゴ礁（リーフ）である八重干瀬（ヤビジ）がある．古くから池間の海人（インシャ）達の豊かな漁場であり，「春は底魚一本釣り漁，夜釣り，夜の赤イカ漁，素潜り追い込み漁．夏はカツオ漁業で使用する生餌を獲り，蛸捕り漁，アギヤー（グルクン追い込み漁），潮干狩り漁」と語り継がれている[4]ように，１年中様々な漁業の操業ができる海である．現在は，釣りやダイビング，シュノーケリングのポイントとして全国から来る観光客に親しまれている．

３．池間島の人口動態[5]

平成22年の国勢調査によると，総人口648人で，カツオ漁が盛んだった昭和35年の2460人をピークに減少し続けている．池間大橋架橋前の1980（昭和55）年の国勢調査による島の人口は1193人であり，その後の30年間で約４割もの人口が減少した．これは，池間大橋で宮古島本島との利便性が増し，また，高齢化率は46.3％（1980年18.4％）と，高齢化が大きく進行している．人口の概要は表１に，その他介護保険利用状況等は表２に示す．

表１　池間島人口の概要[5]

項　　目	データ
島面積	2.83 ㎢
総人口（Ａ＋Ｂ＋Ｃ）	648 人
０～14歳（Ａ）	53 人
15～64歳（Ｂ）	295 人
65歳以上（Ｃ）	300 人
高齢化率	46.30 ％
世帯数	380世帯
就業者（15歳以上）	243 人
第１次産業就業者	89 人
第２次産業就業者	27 人
第３次産業就業者	119 人

表２　池間島民の介護保険利用状況[5]

項　　目	データ
第１号保険者	191 人
第２号保険者	201 人
要介護認定者	97 人
施設入所者	3 人
居宅介護支援利用者	50 人
介護予防支援利用者	11 人
地域密着型支援利用者	
小規模多機能型居宅支援のみ	25 人

いけま福祉センター視察概要

いけま福祉センターは，地域の高齢者や障害者，子ども達に対し，日常的な生活支援，介護支援，子育て支援等に関する事業を行い，誰もが住み慣れたところで，家族と一緒に仲間や子ども達と触れ合いながら，いきいきと暮らせる環境づくりに貢献することを目的として展開されているNPOである．施設は『きゅ～ぬふから舎』とシマおこし部事務所の２施設あり，高齢者介護事業，民泊事業，アマイ・ウムクトゥ（昔から伝承されてきた島で生き抜く力や生きる知恵を掘り起こす）プロジェクト，すまだてぃ（島おこし）活動を実施している．

１．高齢者介護事業

『きゅ～ぬふから舎』は，お年寄りが一人で自宅に引きこもらず，互いに顔を合わせることのできる場として，島の女性達数名がボランティアで始めたサロンであった．発起人達が一人一品ずつ持ち寄り，初めは自宅に知人や自分達の親を呼び，次には親の友達にも声をかけてもらい，徐々に人数が増えたそうだ．その後，自宅には入りきらなくなり公民館を利用したが，給湯設備がなく食器を洗うこともできなかった．そこで，使われていなかった離島振興総合センターを活用し，サロンを開催し，現在の施設となった．

当時，サロンを始めるにあたり，発起人である島の女性達は，60歳以上の島民全員に『こんなこといいなぁ，あったらいいなぁ』と題したアンケート調査を実施した．調査内容は，年齢，性別，家族構成，介護保険サービス利用の有無，「通いや訪問・泊まりのサービスがあったら利用したいか」，「誰と行きたいか」「どこで介護サービスを受けたいか」などであった．その結果から，浮かび上がってきた「池間島から離れたくない」「住み慣れた自宅で暮らし続けたい」という想いを受け，NPOを立ち上げ，その想いを活動の柱に位置づけた．

『きゅーぬふから』とは，島の言葉で「今日も楽しいね」という意味である．「大家族のような島だからこそ，お互いが支え合うのが当たり前のことであり，最後の瞬間まで‘今日も楽しいね’と笑っていられるよう支えていくこと，それが私達の役割だと思っている．」と，代表発起人は話す．

また，『きゅ～ぬふから舎』の理念は，「カナーダンギーマイ，ヤグマリーマイ，スマドゥジャウカイ．カマヌユーンカイヤ，ヤーヌ，タタミヌハナカラ．（たとえ動けなくなっても，寝たきりになっても，島が良い．あの世への旅立ちは，住み慣れた我が家の畳から．）」である．これは，島で生まれた幼なじみの主婦６人が立ち上げた時から変わっていない理念である（写真１）．この理念の指し示す内容が，必ずしも叶うとは限らない現代の社会情勢ではあるが，人と人との心を紡ぎ，紡がれた心があればこの島の言葉，想いを叶えられるサービスが展開で

きると考えているそうだ．だからこそ，地域密着型事業である小規模多機能型居宅介護事業所として運営されている．それとともに原点であるサロンと配食サービスも継続されている．

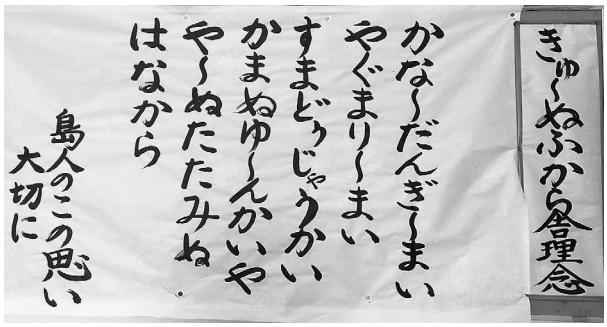

写真１　『きゅ～ぬふから舎』の理念

※本稿への写真掲載の承諾を頂いております．

２．民泊事業

池間島では，70～90歳代になる高齢者が，民泊の受入れを行っている．１軒で５人前後小学生もしくは高校生を１泊ないし２泊宿泊させ，共同生活を体験できる．

また，朝早くから畑に出かけ，キビ刈りや季節の野菜の収穫，畑の手入れ等の農業体験や，島の漁師と一緒に漁船で海へ出て，釣った魚を漁師から手ほどきをうけながら自分達でさばく漁業体験もできる．

その他にも島の料理体験では，野菜や魚は残すことなく使って命をまるごと皆でいただき，生きる力や命の大切さを学ぶ機会となっている．

島の高齢者の知恵や経験・おもてなしを活かした民泊は，来島者への島の暮らし体験の提供と，高齢者の役割や生きがいを創出する介護予防という，観光と福祉を両立させた新たな地域福祉の相互扶助モデルとして注目を集め，年々民泊希望者は，増加の一途を辿っている．

2013年以降は，受け入れ高齢者世帯が約20軒で，年間15校以上，1000人を超える小学生と高校生の受け入れている．小学生は主に沖縄県内の学童であるが，高校生は関西地方を中心とした全国津々浦々から修学旅行での民泊体験である．また，社会学や民俗学，福祉，看護，地域医療を学ぶ大学生のゼミナール単位での民泊体験も増加している．

この年々増加している民泊体験を受け入れることが，島の高齢者たちの元気の源となっている．体は思うように動かなくなってきていても，島で暮らしてきた豊かな経験から培われた知恵や技術，生きる思想を子ども達に伝えるという役割を果たせることが生きがいとなり，「来年も，次の民泊者を受け入れるために元気でいよう．」と，年々元気な高齢者が増している[6]．

３．アマイ・ウムクトゥ・プロジェクト

高齢者の経験や生活の知恵を記録にとどめ，そこから次世代へひき繋ぐべき島の宝物を再発見していく取り組みとして「アマイ・ウムクトゥ・プロジェクト」を実施している．

アマイ・ウムクトゥとは，島で生きてきた高齢者の生きる知恵，生きる力，生きる思想を指す池間島の言葉で，臨機応変に対応できる力，全体を見渡すことができる力，人間力，かしこさ等を意味する．

戦前の姿を知る高齢者へのインタビューを通じて，島のアマイ・ウムクトゥを学び，記録しようと実施されている．インタビューを通じて得られた島のアマイ・ウムクトゥは「手帳」に書き起こして次の世代へと引き継がれている．最終的にはこの手帳を綴った「アマイ・ウムクトゥ本」を作成して，島人達の知恵や経験を一人一人の語りとして，未来へ伝承される予定である．

４．すまだてぃ（島おこし）活動

すまだてぃ（島おこし）活動は，いけま福祉センターだけでは解決できない問題を，島全体で考えて取り組んでいこうと展開している事業である．

島のさまざまな団体や個人と連携し，現在では，池間島にかかわる団体等（池間自治会・池間漁業協同組合・池間学区老人クラブ・池間学区体育協会・池間小中学校PTA・在平良池間郷友会・池間漁業協同組合女性部・NPO法人いけま福祉センター等）と，毎月定例会を開催しているほか，池間漁港周辺の緑化イベントや島おこしに関する講演会，池間島大演芸会，ガイドマップ作成や，「すまだてぃだより」発行による情報共有と連携強化が図られている．

加えて，池間島暮らしツーリズム協議会を発足させ，「池間まるごと暮らしのミュージアム」プロジェクトを体験型ツーリズムとして展開し，観光業につなげようという試みもなされている．

視察時のインタビューより

立ち上げ時の発起人メンバーは池間島で生まれ育ち，宮古本島に嫁いだ６人の主婦である．今回は，その中の代表の二人にお話しを伺うことができた（写真２）．

写真２　視察時インタビュー風景

※本稿への写真掲載の承諾を頂いております．

このNPO立ち上げのきっかけは，20歳代からずっと続けている沖縄の模合（もあい）であった．

模合とは，沖縄独特の相互扶助(ユイマール)システムで，同級生達と月に一度程度集まり，お金をお互いに融通し合う等，地元の人達の知恵から生まれたシステム[7]である．模合で，仲の良かった友達と毎月のように会って，いろいろな近況を報告したり，悩みを聞いてもらったり，愚痴を言いあったりすることが，各年代で長年続けられている．沖縄本土にもある風習で，こうした模合を通して，沖縄は横の繋がりが強いとも言われている．

この発起人達の模合での話題は，20代の頃は，恋人の話，30代は，結婚して子育ての話，40代は夫の愚痴，50代となると自分達の老後の話題へと移り変わっていったそうだ．そして，ふと自分達の老後を考えたときに生まれ育った池間島の現状を考えるようになった．

元来，池間島は高等学校がなく，中学校までを島で過ごすと，一旦島を離れて宮古本島の学校へ進む．ちょうど発起人達が高校生になる頃は，池間島の地場産業も衰退し働く場所がないため，宮古本島や沖縄本土に就職し，そのまま嫁ぐ女性が増えていった．そして，1992年に池間大橋が開通して宮古本島とつながると，より一層若い世代の足が遠のき，島に住まなくなった．そして，池間島の高齢者達から口々に「いけまの子（池間島で生まれ育った子）は島を捨てる．自分の子どもと同じように皆育て来たのに，おかしいね．」と言われ始めた．実際に池間島に立ち寄ると，著しい人口減少と徐々に隣人との行き来が難しくなった高齢者達がひっそりと暮らしている現状を目の当たりにした．そのことが活動のきっかけになった．

そこから模合のメンバーである主婦６人で試行錯誤し，何が自分達にできるのか考えたそうだ．しかし，自分達で悩んでいては真の要望は見つからないと池間島の島民60人程度を接待し，話を聞いたそうだ．その時点で上がってきた声は「昔は，カツオ船があったからよかった．診療所があったときは安心だった．」という内容で，働く場所がないことと医療・福祉の不足が問題点であった．この声の内容を島民ほぼ全員が同じ意見だと訴え，「せめて老人ホームでもあったらこの島で死ねる．」という声が最も多く，小規模多機能型居宅支援事業所を立ち上げる計画を発案した．

その後は，陽気な主婦６人の島への愛着と，持前のバイタリティー，パワフルな行動力で，その時々に必要な人材を集め，時には東京まで出向き移住者を募り，24時間365日密着型のサービスへと拡充し，島で暮らす高齢者の毎日の安心と笑顔にあふれた生活を取り戻していった．

また，発起人の二人は，「最も私達の良かったところは，そこまでの道のりの大変さに屈することもなく，『きゅ～ぬふから舎』が好調に運営されていた現状に満足することもなく，島にとって，もっとより良い方略はないかと，また新たなニーズを洗い出しにかかったところ．元気な高齢者の働く場所がないと言えば，仕事や居場所作りに取り組み，それを支えてくれる若者の移住や短期移住を元気な高齢者の知恵と力を活かせる民泊事業として始めた．また，不登校で悩んでることを相談受ければ，その子たちを預かり，震災で住む場所がないと聞けば，被災した人々に池間島に来てもらって，イチャリバチョーデー（出会えた人は皆兄弟姉妹だ）と，民泊で支援をした．そうして，出会う人々がこの島の文化の素晴らしさに気が付いてくれていることを実感して，次は，島の文化を伝承するプロジェクトだと思い，今の４つの取り組み（図３）に至ったのだ．」と語った．

この根底には，池間島で生まれ育った島人には島や島

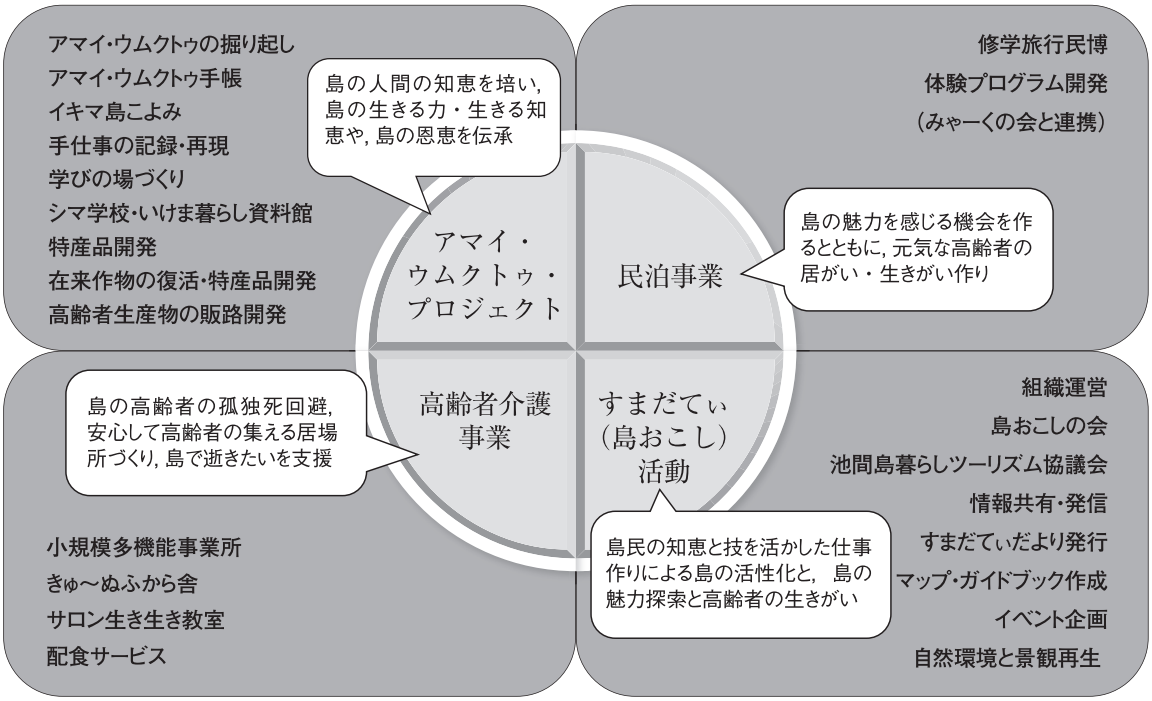

図３　いけま福祉センターの取り組み

の人々への特別な想い入れがあり，「島に育てられ，島に支えられてきた島への恩があるから．その恩返したいという想いが，大きな行動力へとつながっている．だから，職員も利用者も全員毎日笑って過ごして居られる．『きゅーぬふから』と言って笑ってばかり．本当に楽しいよ．」と満面の笑みを浮かべていた．

おわりに

今回，沖縄県宮古島群島の池間島出身の６人の主婦がNPOを立ち上げ，小規模多機能居宅介護サービスを運営から島おこし事業へと発展させている先駆的活動を視察することができた．

しかし，ここまでの事業に発展させてきた道のりには，語り尽せない困難と苦悩があったことも事実である．思わずインタビュー時，「なぜそんなに頑張れるのか？」と尋ねると，その原動力の基盤には，「島に育てられた恩があり，島を慈しみ，島で暮らすことを愛しむ島への想いがある．だからどんなことにも負けれない．」と躊躇せずに答えてくれた．

この島への想いと島に育ててもらった恩恵を，原動力とし，次の世代，さらに次の世代へと伝承していき，島の恩送りを継承していく相互扶助の文化を形成させた池間型地域包括ケアシステムを視察することができた．

近年，沖縄独自の住民力の高さと相互扶助（ユイマール）について，様々な研究者に着目されており[8-11]，その仕組みを各地でどのように作成し，どう展開していくかが，今後の地域活性プロジェクト[12]に求められている．

今回の視察研修は，公衆衛生看護の現場で町づくりに取り組んでいる大学教員と保健師の方々に同行させて頂いた．改めて今，地域看護を担う看護専門職者が手を組み，地域の住民力を活かし，あらゆる世代も，あらゆる健康レベルも，そしてあらゆる家族も支援し続ける相互扶助の形成こそが，地域を活かし，地域に根ざして，地域を守る包括ケアシステムへとつながるのではないかと考える．それは，特別な新しいシステムというわけではなく，ほんの少し昔，日本の各地で見られた隣近所の顔と顔がつながっている古き良き時代の下町の姿にも似ていると推察する．

皆がいきいきと地域で暮らし続けられるために，地域を活かし，地域の住民力を活かし，地域で暮らす「当たり前」の生活をいつまでも継続できるその地域独自の相互扶助サービスの仕組みづくりを探究していきたい．

謝　辞

池間島を愛してやまないお二人の話は，語りの世界に吸い込まれるかのように過ぎゆく時間を忘れさせ，聴く人の胸をも熱くし明日への勇気と活力を与えてくれた．いけま福祉センターの皆様にお会いできたことに深く感謝致します．

また，この機会を準備して下さった沖縄県立看護大学看護学科老年看護学の教員の皆様に深謝致します．

文　献

1）岡本浩二．地域包括ケアシムテム概念と今後の課題－まちづくりの視点から－．横浜商大論文集 28－47, 2017.

2）三菱UFJリサーチ＆コンサルティング．平成27年度老人保健事業推進費等補助金老人保健健康増進等事業 地域包括ケアシステム構築に向けた制度及びサービスのあり方に関する研究事業報告書<地域包括ケア研究会>地域包括ケアシステムと地域マネジメント, 2017−10−12, http : //www.murc.jp/uploads/2016/05/koukai_160509_c1.pdf

3）若林良和．離島水産業の現状と振興策：沖縄県宮古島市を事例とした水産誌的な把握．地域創成研究年報 7 ：17－27, 2012.

4）友利博一，梶原健次（宮古島サンゴ礁ガイドのなかまたち）．宮古諸島の礁原におけるサンゴ礁モニタリング．宮古島市総合博物館紀要 13：77－86, 2009.

5）沖縄県ＨＰ：離島関係資料（平成29年１月），2017－10－12, http : //www.pref.okinawa.jp/site/kikaku/chiikirito/ritoshinko/h28ritoukankeisiryou.html

6）山口初代，大湾明美，佐久川政吉，田場由紀　ほか．男性高齢者の“生きがい就労”の実態とニーズ：Ａ島の当事者の語りから．沖縄県立看護大学紀要 15：43－51, 2014.

7）池上省吾．沖縄の「模合（もあい）」．調査季報 170：74, 2012.

8）加賀谷真梨．シマの維持存続をめぐる女性の多様な実践：沖縄・小浜島を事例に．くにたち人類学研究 2 ：69－90, 2007.

9）木野本はるみ．健康で長生きの人生は如何に可能か－長寿県　沖縄を訪問して－．鈴鹿短期大学紀要 17：43－51, 1997.

10）佐久川政吉，大湾明美，大川嶺子，竹内忍　ほか．沖縄県離島のモデル地域における地域ケアシステム構築に関するアクションリサーチ－住民主体の移送サービスの形成プロセス－．沖縄県立看護大学紀要 6 ：58－63, 2005.

11）古謝安子．沖縄県小離島における高齢者介護と伝統的葬送文化．琉球医学会誌 32（１・２）：１－6, 2013.

12）永井彰．沖縄の島嶼部における地域ケア・システム構築の現状と課題．東北文化研究室紀要 51：１－15, 2010.

受付日　2017年10月13日
受理日　2018年１月10日